カルテット

京雅

カルテット。
イタリア語で四重奏を意味する。
「一緒に風呂入ってもいいか」
ガラスに移るシルエットは、
体のラインを更に強調させて見えた。
「もう脱いでるでしょ！お父さん何歳だと思ってるの？」
脱力してしまう。
考えが小学生レベルだ。
「いいだろ、家族の中を深めるためだよ」
そそりたつ生きのいい性器。
針鼠のように逆立っている。
「わたしだって見られたくないものだってある」
蒸気が想像させる。
波紋が波立つ。
「お父さんは何も気にしないよ。娘の成長が楽しみだな」
視姦される。
心の奥底が暴きたてられる。
「お父さん！」
足音が近づく。
排水口に流れる汚濁が一際大きい。
「そんなに怒鳴るな。体洗ってやるよ」
想像する。
この手でどんなふうに泣かせてやろうかと。
「見ないでよ」
浴槽の縁に体を隠す。
鏡のように反射する水面。
「小さい頃はいつもお前のことばかり見てたよ。ほら」
背筋を強ばらせる愛撫。
舌が鎖骨に吸い付いた。
「ここもこんなに立派になって」
豊かな乳房を揉み解してみる。
余る脂肪はタオルで縛った。
「つっ…」
鼻にかかる掠れた声。
下半身が疼き出した。
「もう女の体だ。乳首も固くなって、ほら。こんなに汁を垂らして…」
蜂蜜がトロリと絞り出された。
働き蜂が次々と平伏す。